

大和国侍之事

一、添下郡筒井順慶老、先祖近衛殿末葉之由申伝也、祖父を順政と申、親父を順興と云、元来南都衆徒之家と云伝ふ、順慶器量の人にて武威を振ひ國中過半討随へて、筒井に平城を築き居城す、自分之領知六万石程といへとも類葉広き人なり、応仁年中より数度大和の大乱に及といへとも、自分所々にて高名いたし、終強剛にして和談す、然る所に松永弾正少弼久秀、筒井を手に入へき覚悟にて人数を払て法隆寺まで打出候を、順慶も筒井より廿町はかり西、梅檀木村と申所まで出向て、順慶之先手ハ島左近・松倉右近兩人に国侍等随て並松と云所に備、互に掛向ひ軍初り松永久秀之先手敗北す、順慶先手の軍兵とも追討にしてけり、余り長追し法隆寺之寺内に松永人数を隠し置候故、此伏兵とも筒井人数之跡を横切しかは、皆敗軍せり、筒井勢無左右城へ入事不成して、直に東山中宇多郡へ落てげり、其頃宇多の城には秋山と申仁被居候、これも順慶の由緒の人にて彼城に居ス、本領へ可_レ帰計策止時なし、松永久秀も宇多へ人数を差向一戦に及へきと智謀をめくらし候得とも、いまた大和ノ国侍も皆々随ひ不_レ附、其上高取之城に遠知、十市の城には常陸介、順慶の味方人なり、此両城ハ道細く險き山にて、宇多には番坂と申切通し入口に有之、無左右責入へき事も不及して、南都東大寺の少し北に当て小高き山あり、此所を築き南には谷川を要害にし多聞_門作りに城を取立、大和一遍に平を可_レ入_(ママ)覚悟相見候得とも、国侍衆過半不_二附_一随也、然所に順慶辰ノ市城主井戸

若狭守に心を合せ、井戸松永に対して打果すへき覚悟にて、松永ハ信貴の城より万余之人数を押出し彼城を取詰て責らるゝに、井戸城を堅固に抱へたり、順慶宇多郡より十市・越知兩人を引具し山伝に辰之市之東の山へ打出る、郡山之城主・小泉之城主、其外順慶一門之歴々悉く松永に対し逆心す、順慶之後詰に相隨ひ申故、松永も辰ノ市ノ城をハ捨て簷本を以て順慶へ掛向合戦有之処に、若狭も自分之人数を払出し突出候、松永へ押掛ル寄手之人数多くて、松永南都へ敗軍す、追^掛松永籙本へ横合向突掛る、松永敗軍し多門之城へ引取、其道筋取切ル、去によつて南都南方京終と申脇道へ引退き町口に火を掛、煙の内紛に漸々多門へ入、松永も歴々之兵士数多打死させけり、順慶多門へ押寄責

詰よと下知あれとも、島左近・松倉右近被申けるハ、唯今多門へ押寄候とも退時ハ落去不^レ可^レ致、又ハ後難も如何に候、先城へ入暫く御休ミ尤との事にて、信長公へ申あけらるに、此儀明智光秀を以て被達、則披露被致候処、御返答に南都の辰巳古市の城を取手と定、多門へ日々の手追ひ能と被仰付候、然とも合戦ハ無之、足輕出し打合計二候、筒井之城に松永番勢を入置候を押寄候得とも其儘城を明渡ス、順慶内謀有之、信長公へ隨身之由被聞及候故、久秀も信長公へ得隨身被仕候、其故順慶と嚙二成、弥多門城ハ久秀持分、扱信貴の城へ歸る、順慶も本領筒井の城へ入、大和二分^(三カ)二程国侍を籙下に仕て弥信長公へ軍事被相勤候、然所に松永ハ信長公へ対し被致逆心、信貴の城に取籠候、城之助信忠公為大将諸軍勢を信貴の城へ被押寄、順慶も

其砌幸と籬下一族人数を押出候、譜代之者共一人松永へ奉公
に出し居申候、密談にて被頼候、相心得申候由にて幸大坂之門跡
へ加勢を頼被遣候、彼者を使者として被申付候、順慶へ其趣
を通ス、順慶二百騎はかり大坂よりの加勢に出イテ、セ為立、河内の
平野まで夜之内に遣し置、松永の使者帰る時分平野に人数
を相隨へ城内へ夜之内に入置、扨信忠公の軍士を未明より取
かけ惣責に被遊候、右に入置人数も城に火を揚裏切仕候、松永
父子天主へ上り切腹被仕候、子息松永右衛門佐久通ハ南都多
門へ被落爰にて自害、又父母一所に自害とも云、夫より国侍
皆々筒井へ随ひ武威盛に成にけり、天正十一癸未年五月
に病死被致候、其後伊賀国へ所替被仰付居城す、関ヶ原御陣
の後三年目に家臣中坊左近と出頭人出来に付て 公儀へ
罷出候而対決之上にて、筒井伊賀守定次悪事共数多有之
に付て切腹被致、伊賀御改易に成

筒井之籬下大将分五十騎也